The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 構成的な共同性 : 岡本恵徳「水平軸の発想」を中心に |
| Author(s) | 土井, 智義 |
| Citation | 待兼山論叢. 日本学篇. 2009, 43, p. 19-37 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/4728 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 構成的な共同性

## ――岡本恵徳「水平軸の発想」を中心に――

土　井　智　義

### はじめに

沖縄の現在をめぐる諸問題を考えるにあたり、沖縄が抱える近代以降の困難な歴史をかえりみたとき、さしあたり沖縄をひとつの植民地状況としてとらえることも可能であろう。では、植民地状況という抑圧下における「抵抗」とは、一体いかなる様態においてなされうるものなのだろうか。近年の沖縄をめぐる言論において、基地問題あるいは経済的な困窮を変革せんとする行為の基盤を「沖縄人」という民族的な主体に求める議論が数多く存在している。たしかに、植民地状況からの解放が民族的主体を中心としたイメージによって描かれることは普遍的な事柄であり、沖縄において「沖縄人」などの民族的主体が登場するのも至極当然のことと言いうるだろう。だが、こうした民族的主体として提起された名称（「沖縄人」など）には、どのような「共同性」が胎動しているのだろうか。

沖縄における民族的主体といったとき、それは必ずしも抑圧を受ける民衆の側からのみ提起されていたわけではないことに留意する必要がある。支配する側からの民族的主体の規定もありうるのだ。1972年５月15日以前の施政権返還（「復帰」）前、米軍統治下において米国民政府布令に「琉球人」という存在が規定されていた事実がある。このとき、「琉球人」とは沖縄に戸籍をもつもののことであったが、一方、米軍統治下の同じ法体系において、「琉球人」とは異なる「非琉球人」という存在も規定されていた。

「非琉球人」とは、米軍統治時代の1954年に制定された布令125号（琉球列島出入管理令）によって定義された存在のことで、アメリカ国籍の軍人・軍属でもなければ、また被占領者の多数者として措定された沖縄籍者（「琉球人」）とも異なる米軍統治下の沖縄における在留「外国人」に相当する人びとのことである。「非琉球人」とされた人びとは、指紋押捺などさまざまな困難を抱えていた[1)]。「復帰」によって、沖縄籍者である「琉球人」および「非琉球人」と分類された者のなかでも奄美籍・「本土」籍の人びとは、その潜在的な日本国籍が認定され「日本国民」となった。だが、その一方で、台湾籍・韓国朝鮮籍・フィリピン籍などの人びとは「沖縄県」に住まう「在日外国人」として新たに日本施政権下において制度的差別を被ることになった。米軍が規定した民族的主体（「琉球人」）とは、戸籍という可視化された指標を前提に構築されたものである。このとき、支配者から規定される民族的主体およびその「共同性」の実体性から、いかに逃れうるのかという点こそが、植民地状況下における「抵抗」にとって重要な課題となるのではないだろうか。

ところで、日米両国による沖縄への抑圧体制に対抗しようとする言論であっても、これまで「非琉球人」という少数者が抱える諸問題についての認識は弱かったと言わざるをえないようだ[2)]。ここで、沖縄から提起された多様な対抗的言論でさえ沖縄内の少数者の問題を充分に取りあげることができなかったと記すことは事実誤認ではないし、もちろん必要なことだろう。しかし、辛苦にみちた状況のなかから紡ぎあげられた沖縄をめぐる思考のなかに、たとえ直截には言及されていなくても少数者の忘却に収斂しないかたちで「沖縄」における「共同性」や「抵抗」を構想しようとした痕跡を見出すことができないだろうか。本稿が扱う岡本恵徳の「水平軸の発想　沖縄の「共同体意識」」（以下、「水平軸の発想」と略称）は、私にとって、まさに上記の痕跡を今に蘇生させるための文章である[3)]。

本稿が中心的に扱う「水平軸の発想」を記した岡本恵徳は、とりわけ少数者への視点を意識的に保持していた書き手だと言えるだろう。例えば、「水平軸の発想」と同時期に書かれた「小さな広告からの思考」では、米兵による傷害事件の被害者が退院した際に、被害者の両親が新聞紙上に「お詫び」の広告を載せたことを取りあげている[4)]。岡本は、この事件が、住民の抗議集会が開かれるなど「全住民にかかわる政治的問題」化したことを当然のこととしつつも、両親の「「お詫び」の気持ち」への違和感に加えて、「両親の言葉を、そのまますんなり受け取ってこだわらない感性が通用するのだとするならば、むしろそのことに、わたしはこだわりたい」と記している。住民たちの中でさえ、ときとして少数者である被害者女性への感覚が失われていく傾向に対して岡本は違和感を表明する。こうした少数者への感覚を手にした岡本にとって、「沖縄」をめぐっていかなる「共同性」や「抵抗」の思考が紡がれたのであろうか。

「水平軸の発想」について、その内容について簡単に述べておくならば、自らの沖縄脱出と東京体験、そして帰郷へと向かう精神史を語り、沖縄戦時の「集団自決」と「復帰運動」の中から、自らの思考の基盤とする「沖縄の思想」の根源をつかみとろうとしている、とまとめることができるだろう。沖縄をめぐる「共同性」や「抵抗」というテーマを考えようとする本稿にとって、岡本の「水平軸の発想」が、まず何よりもやがて訪れる施政権返還を目前にして、施政権の変更または「日本国民」になることによっては基地問題をはじめとする諸問題が一向に解消しえないという認識が明確になるなか、「みずから立っていく思想的基盤」[5)]を探し求めるなかで見出されたものであることは確認すべきことであろう。抑圧的状況の継続が強く予感されるなかで、岡本は「思想的基盤」を、自らにとって外在的な位置に設定された権力への告発とは違ったかたちで行おうとしている。それが露になるのは、例えば次のような部分だろう。

差別政策を、そのまま劣等感と結びつけて、差別から劣等感が生じたり、あるいは差別政策そのものが劣等感を助長した根本的な原因であるかのように考えることは、かならずしも妥当とはいえない。それは、差別に対する拒否も可能であるし、逆にそれに対して自分たちの要求もつきつけて行くことも可能だという視点を欠落した、短絡的な思考にすぎないのである[6)]。

ここで岡本は、被支配者のうちにあるとされる「劣等感」が、差別政策によって一方的に生み出されたとする説明図式を断ち切ろうとしているように見える。具体的には、差別が沖縄の民衆のうちに「劣等感」を成立させ、こうした「劣等感」の克服のために「愛国心」が強烈に発露した事例として鉄血勤皇隊などの戦場動員を理解する図式への疑義である。それは、「劣等感」や差別政策の存在そのものの否定ではなく、被支配者を全的に受動的な存在として捉えることへの批判なのである。岡本は、支配体制と従属的立場におかれた人びととのあいだに成立した相互補完的な関係性を必然的に規定されたものと見るのではなく、偶有的なものと見做しているのであろう。この支配―従属という関係の変更可能性を支配体制の変動に求めるのではなく、従属状況にある「自分たち」の力能の渦中におこうとしているのである。岡本が言う「みずから立っていく思想的基盤」の位置する場所とは、この力能の領域である。岡本における「共同性」や「抵抗」が存立する位相とは、抑圧状況を転回させうる「自分たち」という存在の発見とともに示唆される力の稼働域にほかならない。

### 1.「集団自決」と「復帰運動」をつなぐ関係性

「水平軸の発想」は、『沖縄文学全集』に収録されたことからも知れるように、沖縄の戦後思想の中でも重要な位置を付与されている。しかし、

そのほか多くの論考と同様、近年まで深く内容にまで踏み込んでは論じられてこなかったと言える。例えば、『沖縄文学全集』の解説では、新川明や川満信一たちと並列的に論じられ、「ここで初めて、琉球弧の思想は「反日本国家」のレベルまで押し上げられ、「国家権力批判」の地平まで到達した」と、日本国家批判という大まかな括りによって紹介されている程度であり、具体的な読解が行なわれているわけではない[7)]。だが、このような放置状態がここ数年で大きく様変わりしている。その理由は、我部聖による年譜と解説の作成[8)]、あるいは2006年の岡本自身の死という事情もあるだろうが、やはり「水平軸の発想」が現在に与える強い喚起力にこそあるのではないだろうか。まず具体的な読まれ方から、近年もっとも広く読まれ影響力があると思われるものを見ていくことにしたい[9)]。

精力的に沖縄から批評の言葉を発し続けている仲里効は、「水平軸の発想」と川満信一の「沖縄における天皇制思想」とを並べて論じる。岡本と川満が「集団自決」と「復帰運動」とを串刺しにしながら、この二つの事象を、岡本が「ひとつのもののふたつのあらわれであった」と記し、川満が「天皇（制）イデオロギーに吸引されたのと同じ心的位相」にあるものと見做したことを取りあげつつ、仲里は両者を「沖縄の戦後思想のひとつの到達点」と評価した[10)]。ひとまず仲里がどのような「沖縄の戦後思想」像のもとにふたりを評価したのかという点が問われるべきだが、それは次の引用文にあらわれているだろう。

> 沖縄の［戦後―土井］思想が到達した核心は、まさにあの生活と政治の倒立を極限までいった「集団自決」の修羅に降り立ち、そこにある沖縄のコロニアルな母斑を素手でつかみ出すことであった。コロニアルな母斑とは、「何者かであろうとする」意思的なものが、深く国家と民族を呼び寄せてしまう、目もくらむほどの逆説であり、またアポ

> リアであった。そのアポリアこそ、従属ナショナリズムとしての日本復帰運動に断たれることなく引き継がれているものであった。つまり、「集団自決」と「復帰運動」に、シンメトリックな心の働きをみていたということである[11)]。

仲里が指摘する「沖縄の戦後思想」の成果とは、次の二点にまとめることができる。一つは、「集団自決」と「復帰運動」とを並置することで、両者のなかに「シンメトリックな心の働き」という相同性を発見したということ。もう一つは、この「心の働き」というのがナショナリズムだと看破したということである。この二点をまとめるならば、仲里にとって「沖縄の戦後思想」がもたらした重大な発見とは、「復帰運動」と「集団自決」とが、ともにナショナリズムという共通する「心の働き」から派生したヴァリアントにほかならないというものである。

仲里は、「復帰運動」に対して、「沖縄戦後史を一色に染め、国家と民族の物語の円環に封じ込めた」とも表現しているが[12)]、そうした「国家と民族の物語」の実践としての「復帰運動」観を前提にした上で、「集団自決」と「復帰運動」の両者が双方とも危機的状況のなかでナショナリズムという心性を表面化させたと指摘した点に「沖縄の戦後思想」の成果を認めている。彼がナショナリズムというとき、当然ながら、沖縄の民衆がもつとされる日本国家へのそれが想定されているだろう。

ではここで、仲里によって高く評価された川満・岡本の文章を具体的に見ていくことにしたい。川満は、仲里も引用した場所において、「復帰運動」に触れながら次のように書いている。

> 唯一の国内戦場として、集団自決や学徒動員されたものたちの玉砕をはじめ、ほとんど極限的なかたちで天皇（制）思想にうら切られた沖縄の民衆は、どうして性こりもなく、かつて天皇（制）イデオロギー

に吸引されたのと同じ心的位相で本土を志向し続けるのだろうか[13)]。

川満は「復帰運動」について、「凄まじいばかりの国家求心志向を押し進めてきた」[14)]とも述べるように、「復帰運動」で唱えられた「祖国復帰」という表現に着目し記述しているといえるだろう。川満においては、「集団自決」と「復帰運動」が共通する「心的位相」の発現としてとらえられており、「復帰運動」が「国家求心志向」と位置づけられていることからも知れるように、両者はナショナリズムに支えられて結果したものと考えられている。川満の論点は、「集団自決」と「復帰運動」とを、ナショナリズムという同じ「心的位相」から派生したと解読することにあり、たしかに仲里のいう「沖縄の戦後思想」像に妥当しているといえるだろう。

一方、岡本の「水平軸の発想」の場合はどうだろうか。仲里が参照し、多くの論者によっても引用された部分を長くなるが、引用する。

> だから、状況の変化によっては、たとえば「復帰運動」のような民衆運動としても現実化する契機を持つものとしてそれ［沖縄戦下において沖縄の民衆が戦争動員に駆りたてられた要因であり、集合的行為の基盤となった「共同体的生理」――引用者］は考えることもできる。誤解をおそれずにあえていえば、「渡嘉敷島の集団自決事件」と「復帰運動」は、ある意味では、ひとつのもののふたつのあらわれであったといえよう。［中略］ただ、わたしがここでのべたいのは、「共同体的生理」というのは、まさにその「生理」という言葉どおり生きて動いているものであって、ものようのように固定して存在するものではないということである。だから、それはどのようにもあらわれるものであって、頭から否定的にのみとらえられないだろうということである[15)]。

たしかに岡本も、「集団自決」と「復帰運動」を接合させて思考を展開

していることには変わりがない。だが、岡本は両者をどのような関係性のもとに結びつけているのだろうか。両者の関係性を見るために、続けて岡本の「復帰運動」に触れたところも引用してみたい。はたして、「集団自決」と「復帰運動」の並置は、ナショナリズムから派生した結果と見做す川満と同様の観点からなされているだろうか。また、仲里のいう「沖縄の戦後思想」像にうまく合致するものだろうか。

> 「祖国復帰運動」を支えていたのは、単純な「本土志向」ではなかったと考える。それを支えていたのは、沖縄の人間が沖縄の人間であることを出発点としたところの、［中略］自分たちを自分たちで支えないかぎり、生きぬくことができない、という〝共同体的本質〟であり、国家をも権力をも社会的な条件として相対化しえたところに、「復帰運動」のエネルギーを触発する契機がひそんでいたといえる。そして、自分たちの手でどうにかしなければならないのだという〝共生〟の希求が、直接民主々義的な運動形態としてあらわれたと考える[16)]。

「水平軸の発想」が、「復帰」前において沖縄をめぐる思考の主流をなしていた「復帰運動・思想」に批判的であった「反復帰論」と呼ばれる潮流に括られることを考えると、驚くほど「復帰運動」に対する肯定的な記述であるといわざるをえない。「単純な「本土志向」ではなかった」「直接民主々義的な運動形態」という肯定的な言葉の配置が示すように、先述した川満とは「復帰運動」に対する視線がかなり異なっており、微妙な観方をとっている。岡本は、「復帰運動」について「一種の疎外された状況からの自己回復の運動」とも書いているが、彼の「復帰運動」観には、占領統治に対する抵抗の質がはっきり含まれているのだ[17)]。もちろん、岡本が「七二年返還をむかえ、新しい国家体制への組み込みが現実化されようとするとき、その組織化の指標は有効性を持たなくなっている」[18)]と、当

時行なわれていた「復帰運動」それ自体を無条件に評価したものでないことには留意すべきである。ともかく「水平軸の発想」において注視すべきは、「復帰運動」をナショナリズムからの派生物には還元せず、「本土志向」という傾向のもとに単純化していないという点である。「ひとつのもののふたつのあらわれ」が意味することとは、戦前から継続する日本ナショナリズムの発露に対する糾問なのではなく、一方では戦時下における住民の「集団自決」、もう一方では米占領下の「直接民主々義的な運動形態」というきわめて能動的な共同性の発現という全く正反対に見える事象が、沖縄の民衆を現在まで捕捉しているという「共同体的生理」を機軸として現働化したという認識なのである。

「ふたつのあらわれ」と書いた直後に岡本は、「共同体的生理」とは、「もののように固定して存在するものではな」く、「どのようにもあらわれるもの」と書く。岡本において、「集団自決」と「復帰運動」を接合させて記述したのは、両者に共通するナショナリズムという固定された「心の働き」の確認などではなく、「共同体的生理」というつねに差異化しつづける流動的な領域といかに交渉し、生をつむぐのかという点に他ならない。したがって川満とは違い、仲里が評価した意味での「沖縄の戦後思想」像の中へ岡本を包含することは難しいと考えられるのだ。川満そして仲里が、「集団自決」と「復帰運動」に相似する関係性を見出し、ナショナリズムという心性を発見したのだとすれば、岡本は、共通性ではなく両者のあいだにある差異こそを見つめ、その上でこのまったく異なる二つの事象の底に「共同体的生理」という運動形式を感知したのである。言い換えれば、川満・仲里においては、「集団自決」と「復帰運動」とは似ており、ともにナショナリズムという基体からの派生物である。一方、岡本における「集団自決」と「復帰運動」は異なっており、さらに「共同体的生理」は両者と直線的な関係にあるのではない。この「あらわれ」と「共同体的生理」

との屈折した偶有性こそが、「自分たち」の力能が登場しうる余地だと言えるだろう。

## 2.「共同体的生理」

岡本にとって「共同体的生理」とは、「集団自決」と「復帰運動」という二つの事象に共通する原因などではなく、様相を異にする両者から遡及的に見出すことのできる潜在的な領域なのであった。では、こうした潜在性に位置づけられる「共同体的生理」とは、いかなる問題構成において思考されるのであろうか。

岡本は、「共同体的生理」という言葉を、まず「集団自決」に関する文章から取りだしている。「水平軸の発想」が執筆された1970年、「集団自決」の起きた渡嘉敷島に駐屯していたかつての日本軍の指揮官であった人物が、島で行われる慰霊祭に参加しようとしたことから、沖縄をめぐって「集団自決」が議論の的となっていた。そうした「集団自決」に関する文章から、岡本は「共同体の生理」という言葉を引用し、なおかつ自らの文脈のなかで転成させていく[19)]。

渡嘉敷島の「集団自決」について論じた石田郁夫の一文、「この孤島の、屈折した「忠誠心」と、共同体の生理が、この悲劇を生み出した」[20)]という言葉を岡本は受け、「集団自決」が生起する過程に住民間における集合性が作用したという意味において石田の指摘を暫定的に首肯する。だが、即座に「共同体の生理」が直線的に「集団自決」という結果を導くかのような議論に対して疑問を呈しつつ次のように述べている。

> だから［「集団自決」の――土井］問題は、〝共生〟へとむかう共同体の内部で働く力を、共同体自体の自己否定の方向に機能させた諸条件と、そういう条件を、あらがい難い宿命のようなものに認識した共同

体成員の認識のありかたにひそんでいたといえるだろう。むろん、そういう認識のありかたは「共同体の生理」によって大きく規定されているにはちがいないのだが、それは「共同体の生理」そのものから必然的に生じるものではなく、共同体の歴史的体験と、共同体を構成する成員の歴史意識によってどのようにでもかわりうるものである[21)]。

石田において、「共同体の生理」は「集団自決」を導く原因となった領域であり、「共同体」に住まい、そこに捕捉されている人間にとって桎梏でしかないものである。しかし、岡本にとって重要なのは、先に述べたように、「共同体的生理」と「集団自決」との関係性が、直線的な因果関係として規定されるものではないという点である。岡本が把握する「共同体の生理」とは、「内部」から自律的に「共同体」の人びとの生を生産するものであって、さまざまな条件や「共同体」に生きる人びとの反応のし方が変化することによって、ときに相反し合う無数の「あらわれ」を弾きだす胚種のようなものなのである。だからこそ岡本は、先にも見たように、「共同体的生理」という領域を、「直接民主々義的な運動形態」と見做すかつての「復帰運動」の基底部にも認めるのだ。岡本における「共同体的生理」という設定のポイントは、「集団自決」や「復帰運動」などといった「あらわれ」とのあいだに必然性で結ばれる関係性ではなく、偶有的な関係性によって繋がれているという点にあるのだろう。石田のように、「共同体的生理」を沖縄の人間にとっての足枷としてのみとらえ唾棄しようとするのではなく、こうした運動性に自らが引き込まれながらいかに生を紡ぐのか、更に、「共同体的生理」の領域を介して行なわれる支配にいかにして抵抗を行うのかという問いにほかならない。

ところで、この「共同体的生理」とは、戦間期の関西における沖縄出身者の活動を分析した冨山一郎が言及する「同郷性」なる領域と比較するこ

とは有効なことだと思われる。ここでいう「同郷性」とは、沖縄出身者が関西の労働市場に参入する際にさまざまな情報を獲得することができるという意味において合理的に必要な場でもあるが、それだけではなく同郷人というアイデンティティを形成する原理にもなるのである[22)]。こうした単なる合目的性としてのみ機能するのではなく、人びとの「共同性」をも生産する領域としての「同郷性」について冨山は次のように分析している。

> このような「集合心性」としての「同郷性」は、沖縄出身者の社会運動の基盤となると同時に、支配・統合の力動源にもなる。すなわち、「同郷性」自身は生活世界のなかで明確に意識化されずに、身体的な感覚としてしか存在しえない。社会運動にしろ支配・統合にしろ、問題はこの力動源の処理なのである[23)]。

「同郷性」とは、確認するならば、社会運動の基礎ともなりうるが、その同じ根拠において支配や統合の梃子にもなりうる「力動源」である。冨山が分析した「力動源」としての「同郷性」と同様、「共同体的生理」とは、まずもって「共同体」にかかわる人びとを飲み込み捕捉する運動だが、それは、抵抗の基盤にも支配貫徹のためのスプリング・ボードにもなりうるものであった。

たしかに「共同体的生理」は、「集団自決」に至ったように支配者にとって都合のよい結果、民衆にとっては自滅的な様相を現前せしめることがある。だが一方で、「共同体的生理」は沖縄の民衆にとって、たとえば岡本が「直接民主々義的な運動形態」と表現した「復帰運動」のように鋭い抵抗の土台にもなるのである。こうした支配と抵抗との相反する局面において「力動源」となる「同郷性」を、冨山は沖縄出身者にとって「概念化されて把握されるものではなく、彼らが生まれ育った環境が経験的に彼らの体に刻み込んだ身体的な感覚」[24)]と定義した。つまり、「同郷性」とは、

概念といった悟性的なものとして抽出されるのではなく、あくまでも「身体的な感覚」という関係性のなかで作動する「力動源」として、そうした運動性としてのみあるものなのだ。

以上、「同郷性」なるものを媒介にして「共同体的生理」という領域を再度考察してみたい。「共同体的生理」という潜在的な領域を設定する要点とは、ある「共同体」を生きる人間の行動を縁取るその態様が、ある悟性的な観点から演繹されて行なわれるのではなく、自らの自立的な意志を潜りぬけたところにある「共同性」を帯びた領域からの動的な作用によって影響を受けていることに着目することにあったのだ。このとき、「共同体」に内包される「共同性」とは、あらかじめ設定された固定性ではない以上、ある同一性として見出されるものではありえないだろう。

先に述べたように、岡本は「水平軸の発想」において「沖縄の思想」について考えることを課題の中心にすえているのだが、まさにこの「共同体的生理」こそが「沖縄の思想」の焦点になるのだ。では、なぜ「共同体的生理」は岡本にとって重要性を持ちうるのか。それは岡本における「思想」の姿勢に関わっているだろう。岡本は「思想」というものについて、それが「かくあるべし」という固定された着地点のようにとらえ、そこに向かって現実を改良していくプロセスとしてではなく、「かくある存在としての自己」をとらえ返しながら「かくあるべし」という原理に衝突させていくような出来事として考えている。たとえば、次のような箇所にそれはあらわれている。

> 本来、思想とは、かくあるという存在からの絶えざる呼びかけに柔軟に応えることで、かくあるべしという原理をふだんに強めていくものであり、したがってそれは、論理として体系化された部分においてだけではなく、情念の領域にまでふみこむことにおいて生きていくので

はないか[25)]。

体系化された「かくあるべし」という論理のなかに容易には位置づけがたい「情念の領域」の重要性が指摘されているが、この「情念の領域」にこそ「共同体的生理」は感得されているのだ。「「沖縄の思想」というものがもしなりたつとするならば、そういう、いまだ論理化されない、情念の領域に多く潜んでいるかにみえる「共同体的生理」をとらえなおすこと」[26)]だというのが岡本における「思想」の方向性である。

このように「共同体的生理」の摘出は、「かくあるべし」という原理の貫徹をめざすのではなく、「かくある」という位置からいかに「思想」をとらえるのか、という岡本の「思想」観と密接につながっているだろう。すなわち、「思想」とは、「かくあるべし」という固定点にむかう直線として造型されるのではなく、「共同体的生理」に捕獲された「かくある」という不可視の「共同性」との交渉による変化するありさまにほかならない。そして、この過程は、支配―被支配の関係性に亀裂をもたらす、岡本における「抵抗」でもあるのではないだろうか。

このとき、固形的な形態を想定しえない潜在領域としての「共同体的生理」において、人びとが支配に抗するために向き合うべき問いとは、次のような「新しいアナキズム」の追求と同質のものだと言えよう。つまり、それは、高祖岩三郎が「対抗運動であるだけでなく、それと同時に新しい何かの構築であるような社会的過程」、あるいは「現在進行形の運動＝闘争における「構成的な過程（constitutive process）」」と呼ぶ「新しいアナキズム」を希求することに近似するのである[27)]。「共同体的生理」に捕捉されつつ、いかに人びとの「共同性」を生産していくのかという問題が浮上する。

## おわりに

冒頭で提起した問い、「沖縄」という領域をめぐる「抵抗」とはどのようなものでありうるのだろうか。不定形の「共同体的生理」とともに見出される不可視の「共同性」。岡本はこの「共同性」を見据えながら、施政権返還直後の1972年6月、次のように「沖縄」をとらえている。

> 沖縄に生まれかつ育った人間が、即自的に「沖縄人である」ということはない。そういう人間が、自己のうちに「沖縄人」としての特質を自己の生き方とのかかわりにおいて意識しそれと対峙するとき、その人間は初めて「沖縄人となる」のであろう。そして、そういう「沖縄人となった」人間にとって、「沖縄的なもの」はひとつの意味を担うのである[28)]。

ここでは、確かに「沖縄人」という民族的な響きをもつ名称が明記されている。だが、この「沖縄人」とは即自的に存在している固形物ではなく、あくまでも「～となる」という変形作用の過程の中でこそ意味をもつのである。もしも「抵抗」の「基盤」というものがあるとするならば、「沖縄人」として外延を画定しうる範疇が問題なのではなく、「沖縄人となる」という過程こそが該当するのだと考えられる。

では、岡本の述べる「沖縄人となる」という過程において、先述した「非琉球人」などの少数者はどのように関係するのだろうか[29)]。あくまでも「なる」ことに繫留された「沖縄人」における「共同性」は、つねに潜在的な領域であり、現在進行形でのみ登場する「構成的な過程」である。抑圧的な状況下において、支配体制との関係性に偶有性をもちこみうる「自分たち」とは、予め「内部」と「外部」が存在しているわけではあるまい。そうした「沖縄人となる」と共起する「抵抗」とは、少数者の忘却を必然化

せず、支配する側からの規定からも逃れうる「共同性」を構成する過程にこそ存在するだろう。

**注**

1）法務局出入管理局『琉球における出入域管理』1968年など参照。

2）新崎盛暉『戦後沖縄史』日本評論社、1976年、358-368頁。

3）「水平軸の発想」の初出は、谷川健一編『わが沖縄第六巻・沖縄の思想』木耳社、1970年である。同書には新川明「『非国民』の思想と論理」や川満信一の「沖縄における天皇制思想」なども掲載されており、後に「反復帰論」と呼ばれる論者が顔を揃えているという意味でも当時の沖縄の思想を考える上で重要な著作の一つである。「水平軸の発想」はその後、岡本の単行本『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社、1981年に収録され、さらに『沖縄文学全集・第18巻』国書刊行会、1992年にも採録されている。

4）岡本恵徳「小さな広告からの思考」『「沖縄」に生きる思想』未来社、2007年、50-52頁。初出は、『沖縄タイムス』1970年７月５日。

5）岡本恵徳「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社、1981年、227頁。以下、「水平軸の発想」の引用は同書から行なう。

6）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』212頁。

7）高良勉「琉球弧の思想の可能性と不可能性」沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集・第18巻・評論Ⅱ』国書刊行会、1992年、373頁。

8）我部聖「沖縄を読みかえるまなざし―岡本恵徳著作目録Ⅰ―」「岡本恵徳著作目録」『琉球アジア社会文化研究』第６号、2003年。および我部聖「岡本恵徳著作目録」岡本恵徳『「沖縄」に生きる思想・岡本恵徳批評集』未来社、2007年。

9）以下に論じる仲里効の論考のほか、岡本の「水平軸の発想」を近年論じたものとして、次のものがある。屋嘉比収「「水平軸の発想」/私的覚書――「集団自決」を考える視点として」『琉球アジア社会文化研究』第６号、2003年10月、上村忠男「連載・沖縄通信（7）「水平軸の発想」にささえられた「共生」の思想」『図書新聞』2794号、2006年10月21日、冨山一郎「言葉の在処と記憶における病の問題」冨山一郎編『歴史の描き方③記憶が語りはじめる』東京大学出版会、2006年、我部聖「岡本恵徳試論――戦争・記憶・沈黙をめぐって」『沖縄文化研究』34号、法政大学沖縄文化研究所、2008年３月、阿部小涼「「集団自決」をめぐる証言の領域と行為遂行性」新城郁夫編『沖縄・問いを立てる３・攪乱する島』社会評論社、2008年、徳田匡「「反復帰・反国家」の思想

を読みなおす」藤澤健一編『沖縄・問いを立てる６・反復帰と反国家――「お国は？」』社会評論社、2008年、屋嘉比収「戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み・沖縄戦地域史研究の変遷、「集団自決」、「強制的集団自殺」」屋嘉比収編『沖縄・問いを立てる４・友軍とガマ』社会評論社、2008年、新城郁夫「反復帰反国家論の回帰――国政参加拒否という直接介入へ」岩崎稔ほか編『戦後スタディーズ②…60・70年代』紀伊國屋書店、2009年。

10）仲里効『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』未来社、2007年、210頁。

11）仲里効、前掲『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』209頁。

12）仲里効、前掲『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』209頁。

13）川満信一「沖縄における天皇制思想」『沖縄・根からの問い――共生への渇望』泰流社、1978年、124-125頁。初出は、先述の谷川健一編『わが沖縄第六巻・沖縄の思想』木耳社、1970年。

14）川満、前掲「沖縄における天皇制思想」『沖縄・根からの問い』104頁。

15）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』259頁。

16）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』243-244頁。

17）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』244頁。

18）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』245頁。

19）以下、文中に「共同体の生理」と「共同体的生理」という言葉が登場する。基本的に、前者が後述する石田郁夫の言葉であり、「共同体的生理」は岡本によるその言い換えである。岡本は、両者を区別して用いているわけではないので、引用の都合上、煩雑であるが併記したまま論述していく。

20）石田郁夫『沖縄・この現実』三一新書、1968年、139-140頁。

21）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』242頁。

22）冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」――「日本人」になるということ――』日本経済評論社、1990年、149頁。

23）冨山一郎、前掲『近代日本社会と「沖縄人」』149頁。

24）冨山一郎、前掲『近代日本社会と「沖縄人」』149頁。

25）岡本恵徳、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』198-199頁。

26）岡本、前掲「水平軸の発想」『現代沖縄の文学と思想』246頁。

27）高祖岩三郎『新しいアナキズムの系譜学』河出書房新社、2009年、14頁。

28）岡本恵徳「戦後沖縄の文学」岡本恵徳『沖縄文学の地平』三一書房、1981年、48頁。初出は、『中央公論』1972年６月。

29）少なくとも、岡本において「沖縄人となる」ことの意味は、岡本の伝記的な側面からして、彼自身がどのようなアイデンティティを持っていたか否かにかかわらず複雑である。というのも、彼は沖縄を脱出した東京在住時に、

婚姻届を出す際に戸籍を東京に変更してしまっているからである。彼自身が、占領下の多数者として規定された「琉球人」を離れ、「非琉球人」という資格のもと沖縄に生きていたのである。岡本恵徳「忘れ難いこと二つ三つ」岡本恵徳『「沖縄」に生きる思想』未来社、2007年、189-193頁。

（大学院博士後期課程学生、日本学術振興会特別研究員）

## SUMMARY

**The Constitutive Community**
On Okamoto Keitoku's "The Idea of a Horizontal Axis"

Tomoyoshi DOI

In this paper, I consider the meaning of community in "The Idea of a Horizontal Axis" by Okamoto Keitoku. Okamoto discovered the patentially "communal physiology" by pondering the collective actions of the people of Okinawa as they appeared in the "compulsory group suicide" and "the Reversion movement", two events that seem to oppose one another diametrically. Althoagh "the communal physiology" could be captured by power, it could become a basis for the resistance of the people. Such "communal physiology" improvised the formation of community. Community which Okamoto explored was not a legal and definite body, but an open-ended constitutive process. After Okinawa's Reversion to Japan, he proposed a problematic of "becoming Okinawan". It was such "Okinawan" that suggested the possibility of a constitutive community.

**キーワード：**偶有性，「共同体的生理」，共同性，構成的な過程，「沖縄人」